JCTIC
(マレーシア：コタキナバル)

谷口良雄（埼玉県坂戸市）

滞在期間：2018 年 1 月 8 日～ 4 月 2 日(85 日間)
活動場所：マレーシア、コタキナバル JCTIC

1. JCTIC 参加までの経緯と動機

地元埼玉県のボランティア日本語教室活動の後、中国の日本語専門学校で 5 年間の日本語教師をし、一昨年帰国しました。それから地元の日本語学校で主に技能実習生を対象に教えていました。

まだ元気な間にと、もう一度海外でのやりがいを求めていた時期でした。そんな時に WSC を知り日本語ボランティア活動に参加しました。

2. JCTIC での担当クラス　　3 クラス

毎週　火曜日と金曜日のクラス
　午後 5：50～7：20(90 分)　　学習者は 5 名
毎週　土曜日前半クラス
　午後 1:30～3:30(2 時間)　　学習者は 6 名
毎週　土曜日後半クラス
　午後 4:00～6:00(2 時間)　　学習者は 2 名

学習者は、中学生、高校生、大学生、主婦、銀行員、イスラム教宣教師、無職など、15 才から 45 才くらいまでです。高校生と大学生の姉妹もいました。

日本語を学ぶ動機は、「日本に留学するため」、「日本のアニメを日本語で知りたい」、「日本や日本語に興味がある」、「日本で働きたい」、「イスラム教の日本人のお役に立ちたい」などでした。

3 クラスともミニクラスで名前も覚えやすいし、一人一人に目がゆき届きます。会話練習では、1 人当たりの発話時間と発話回数が確保でき効率的です。週 1 回～2 回程度、この学校でしか機会がありませんから、日本語に接する時間と回数が多く持てるように、毎回必ず宿題を出しました。皆さんほとんど完璧なほどこなしてきてくれました。

3. 日本語授業　四分六分の原則

私は英語が苦手のせいもあり、媒介語(英語など)を使わず日本語だけで行う「直接法」で授業をしました。日本語に接する時間が多いほうがいいと思うからです。もちろんその場合も未習語はなるべく使わないよう配慮し、既習語だけを使うようにしました。

その場合、コミュニケーションを取るのはかなり制限されますので、手振り、身振り、表情、絵を描く、フラッシュカードを使う、広告チラシ(レアリア生教材)を利用するなど、「こと・もの」を総動員して何とか分かってもらおうと奮闘しました。窮すれば何とかなるものです。文法的な説明は、翻訳本の英文を学習者に読んでもらい理解してもらう方法をとりました。

もう一つ気を付けたことは、教師としての発話時間が長くなり過ぎないようにしたことです。教えよう、分かってもらおうと、ついたくさん話してしまいがちです。そうすると、学習者はますます混乱して分からなくなります。日本語教授法で重要とされていることの一つに、「四分六分の原則」があります。 授業時間中の発話割合・時間は、教師が四割以下、学習者は六割以上にするのが望ましいというものです。

そこで、日本語の例文をみんなが繰り返し(斉唱)言った後で、学習者自身が考えた文を発表してもらいます。その後、「先生の質問～学習者の答え」、「学習者同士の質問と答え」など、問答式でできるだけ学習者の発話時間を多く確保するようにしました。

オーケストラでいえば、教師は「指揮者」の役割を果たすのがいいと思います。単調さを避けるため、途中でブレイクタイムを取り、スローテンポの日本語の歌をみんなで歌いました。キロロの「未来へ」は、東南アジアでは多くの人に知られているようで、7～8 割の学習者は知っていました。英文の歌詞をつけて配りました。「手紙～愛するあなたへ」もよく歌いました。また、全員でできる簡単なミニ活動(ペアワーク、グループワークなど)をし、楽しく学べるようにしました。

いろいろ工夫して授業を行いましたが、「これでよかった」と満足できたことは一度もなく、反省の連続でした。毎回、「教えることは、逆に学習者から教え方を教えられること」の思いでした。

4. 今後の課題　教えるを磨く

日本や日本語に興味を持って教室に来てくれることはとても嬉しいことですが、学習者はお金を払って学んでいます。私たちボランティア日本語の先生は、プロの日本語教師と思われていることでしょう。それに応えるためにできる範囲で、私たちは教える知識や教え方を磨く必要があります。

そのためには、「日本語の教え方の本を読む」、「インターネットでサンプル授業の動画を見る」、「日本語教師養成学校の体験授業に参加する」、「各地で開催されている日本語に関する講演会、講習会に参加する」あるいは機会があれば JCTIC 経験者からアドバイスを受ける、などいろいろな方法があると思います。「日本人の子供に教える日本語」と「日本語を母語としない人に教える日本語」は全く違いますから。

5. コンドミニアムでの生活

11 階の部屋の窓やバルコニーからの朝焼けは、素晴らしい眺めです。刻々と変化する空の景色を眺めて「ああ、素晴らしい 1 日の始まりだ！」と感動する毎日でした。

ルームシェアの方はよく自炊をしていましたが、私はほとんど外食でした。ブランチは 10 リギット(約 300 円)、晩飯は 10～15 リギット(約 300～450 円)で、地元のローカル食堂の平均です。マレーシアンレストランの他、中華系、韓国系、インド系、シンガポール系、日系など食べ比べの食事を楽しむのもいいと思います。

コンドミニアムのオーナーの氏原様ご夫妻は、地元に長く住んでいらっしゃるからこその特色あるレストランに、私たちを時々連れて行って下さいました。美味しく、素敵な雰囲気の店を体験しました。夜には互いの授業の様子を話し合い、「もっとわかりやすい教え方はないか」、「もっといい教え方はないか」など、遅くまで「研修！？」したことはとても参考になりました。一人になりたい時は個室で授業の準備をし、入っている WiFi でインターネットをして過ごしました。

6. フリーの時間を楽しむ

コンドミニアムの中庭にあるプールサイドの椅子やマットで青空のもと、爽やかな風を感じながら本を読み、疲れると昼寝あるいはビールを飲むという極楽の時を過ごしました。こんな生活が続いたら日本に帰った時、まともに社会復帰が出来るのだろうかと思う時もありました。(今、その杞憂は消えました) 時にはミニバスで 1～2 時間の郊外へ出かけ、ジャランジャラン(街歩き)しました。観光は、三角屋根の州立博物館、巨大で美しい建築物のモスク、街全体を眺望できるシグナルヒル、夕陽がよく見えるオーシャナス広場やスリアサバモール近くの岸壁、あらゆる物が並ぶサンデーマーケット、陽が沈むと現れるナイトマーケット(屋台街)などで、街歩きに疲れたらホテルの喫茶室で休んだり、マックのテラス席で自然の風と扇風機の下で読書しました。バックパッカーの宿が多いオーストラリアン地区にはお洒落なカフェも並んでいます。

サバ州立鉄道のローカル列車で、各駅停車の小旅行もしました。ジャングルクルーズでは、野生の手長ザルや蛍の群舞を見ました。高速モーターボートでの小島巡りは、とてもスリルがあるものでした。ジュツセルトンポイントから出る高速船で、KK から一番近くて豊かな国、ブルネイ王国にも行きました。ラブワン島経由で南シナ海沿岸をブルネイまで約 5 時間、片道およそ 2,300 円です。ブルネイには、アルコール類はどこにもありません。中華の店でも、ホテルでも。

7. 生活費　85 日間の滞在費用 25.5 万円

日本～KK 間の航空運賃を除き、およそ 25 万 5 千円でした。宿泊費 、 飲食費、数枚の下着類、短パン、サンダル、電車賃、バス賃、タクシー代、船賃、観光のための入館、入園料金、ブルネイ国小旅行 2 泊 3 日の費用、若干のお土産代などが含まれています。

最後に、今回出会った学習者たちが、来年まだ JCTIC で日本語を学び続けていてくれたらどんなに嬉しい事でしょう。日本語でのコミュニケーションがもっと出来るはずです。来年そこで再会出来るかも知れません。